

地球と遊ぶ、地球に喜らす

# Outdoor®

Produced by RYOBI

## 超自然

more natural than "natural drift"

ナチュラルドリフトは、あくまで基本技術に過ぎない。そこに、誘い、惑わせ、挑発し、謀る。いわは超自然的レタッチを加えることにより、餌に命が宿るのだ。

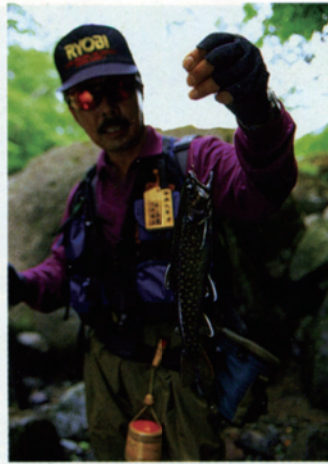
'97-'98

hunting the wild in somewhere Zao.



CRS黒部源流 5.4m(This is it)
●源流の岩や枝の接触に負けない、超硬度CRS(強化セラミック表面製法)。進米のベタつきもなし。繊細な話いと、タモなしで50cm級の野生を捕るタフネスを両立

### イワナ竿に求めるのは、50cm級でもタモなしで捕れるタフネスよ 栗田善孝



くりた・よしたか(49歳)
●蔵王山麓で、小岩井の牛乳を売って暮らす。'83年から'95年までは職漁師として野生イワナも売る。本流でもほかの水系でも同釣法で負けない(過去参加大会7回のうち優勝5回・2位2回)。弟子多数なれど会はなし

基本的に、ヒラタはイワナの鼻先に落とす。氏の言う「直爆」だ。ヒラタが突然現れ、食欲もあろうが、イワナは度を失い反射的に食ってしまうのだらう。白泡の中やゴミが多いときは手前30cmに撃ち、餌であることをアピールする。パレたときはイワナの後頭部、視野ぎりぎりに打つ。潮尻まで追うが、食わないときは餌をビックアップし、未練たっぷりに定位置に戻ったイワナの目前にヒラタを撃つと食うという。撃つって、誘う。誘いの振幅は、流速や水温により変わる。「撃ち」は、竿も選ぶのだ。通常のレベルでは、釣りの楽しみはハブニングだ。魚が食うのは事故に近い。しかし栗田は、そこまで見て、釣る。当然だらう。射撃は、獲物を見つけて照準することが前提だから。



CRS一閃 5.3→6.1m(4-variation)
●ピンポイントに投餌でき、穂先がブレず、感度が高く、尺上みか掛ければ剛に乗る。深流竿の基本性能を徹底的に追求。深と、あなたを直結する高感度な良導体。CRS採用

### 縦に振れば縦に、横に振れば横に振れ、穂先が意志に従うこと 諏訪本修三



すわもと・しゅうぞう(41歳)
●道志村に生まれ、10歳よりヤマメ釣り、アユの友釣りに親しみ、道志の石ひとつまで知りつくす。本流のメタルライン釣法、引き抜き釣法のバイオニア、「Best Friend」クラブ会長。弟子(楽しい釣友)約20名

「トロ場は水温が高そうだし?」でも水量があるから案外冷たくて、底流れも強いんです。無論のある人はいつばいるだろう。諏訪本はしかし、道志で30年間釣ってきたデータで、現実を語っている。憶測や神秘は語っていない。「前アタリってなんだよ?」と、彼は言う。前アタリとは、目印に現れる(つまり糸がフケたり張ったりする)以前のアタリのことを「一般に」という。「そんなのとれたら超能力者だつて」気配とか、勘とかいったレベルの話抜きにすれば、それはそうに違いない。諏訪本の釣りには、いつも釣りを妨げる先入観はない。意志に従う、ハイレスポンスな竿によって入力された現実(データ)によって、現実がつねに更新されているからだ。

### 竹竿は楽器なんだよ、節が音叉になって感度がいい。カーボン竿にだって、可能なはずだ 石原魚賢



いしはら・ぎょけん(57歳)
●14歳にしてイワナと出会い、奥利根産、クマとの格闘、幽霊とのソウゲーなど波瀾万丈のジンセイが始まる。20代を職漁師として過ごし、現在は釣りライター、画家、など本業不明。前橋深流会会長。弟子12名

竿は、止めるからこそ仕掛けを送りこむ。竿は振るものだと意識すると、穂先が死んで仕掛けが飛ばない。自分にとらわれていると、そういう弊害が発生するのだ。翁は言う。「穂先ではなく、仕掛けではなく、それは、連続したひとつのものイメージすることが大切よ」。むしろ道具の質も大切だ。「竿とはつまり音響装置なんだよ」竹竿がよいのは、節が極微かな振動を共振させ増幅して手に伝えるからだ。感度とは音波。竿はよき楽器であらう。翁は、カーボン竿でそれを実現しようとしている。イマジネーションの質を、高めるために。釣りたいのは自分。釣るために、自分をなくそうとするのもまた自分。



PTメインストリーム本流 6.0→9.0m(6-variation)
●本流竿だからこそ、極小オモリ、極細糸での対応性、操作性を。ズームではなく、取りこみのためのアジャスターが、竹竿の共振効果による高感度をも実現



3cmの仕掛けに3Bのガン玉。1.2号の道糸は1年使う。ハリはハリス付きの既製品だ



①立ち位置はできるだけ変えず、竿節を送り出すことによってピンポイントを狙う。②高速によって、ヒラタを激しく、あるいは速く震わせ誘う



トは、減点法の、シミュレーションの釣りであり、釣りの創造性や攻撃性を発揮しにくい。「ヒラタが空から降ってくるわけがない、だから直爆で、食わずのよ」

く流しても釣れることはあるよ、せいぜいが縄張りをもってない6寸以下のがね」「それも、食おうと待ってるやつしか食わんわな」「餌が不自然に流れたら、つまり、そいつも食わないわけだ。ナチュラドリフトは、減点法の、シミュレーションの釣りであり、釣りの創造性や攻撃性を発揮しにくい。「ヒラタが空から降ってくるわけがない、だから直爆で、食わずのよ」



①-②目印は顔上で使う鶏の羽。それが(いちがいに)は雷えぬかり半回転したときに合わせる。手に感じてからでは遅い、と言う

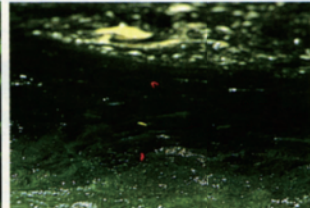


「ヤマメは、白泡の中に居続けることはできないんです。ストレスに弱くて、夏場はとくに底にいる」雨後は淵頭に、カゲロウが羽化すると浅場に出てくるかむろんいちがいに言えないが、基本は底

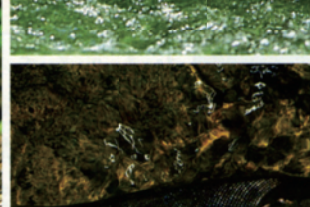
「ヤマメは、あなたが思っているより、もう20cm、深い所にいるんですよ」。イメーが現実的で、実効性がある。



白昼。ヤマメが食わないのは、酸欠だから、摂餌より呼吸で精いっぱいだからという。それでもこの一尾



←視覚(目印)と触覚(竿から届く音波)という感覚入力により、水面下の餌と深魚を読む。そこに餌釣りの難しさおもしろさがある



4今回ロケした、宮城県白石川上流。七カ宿ダムバックウォーターで釣ったヤマメ。2号を切った去るサクラマスもいるという



### ヒラタが空から降ってくるわけないわな、だから瞬間勝負で、食わずのよ。 撃ちの栗田(源流にて)

餌は周年ヒラタ一本。チョロより毛バリより食いやすいという経験則と、春から秋まで大量に捕れるという現実的理由による



「底をとって深い」

つ。ピンポイントにいるイワナを狙い撃ちで狩る。栗田の釣りは、釣りというよりは射撃に近い。①全長120cmのちようじん仕掛けで、②餌は周年ヒラタ一種。③基本的に沈めず、水面で釣る。栗田の「狩場」は蔵王山麓のある源流で、放流はなく、イワナは警戒心に満ちた野生である。その野生を、氏に言わせれば、「半径5cmのピンポイント」にヒラタを撃ち、水面のヒラタを震わせ誘うことによって食わせる。その強引な釣法によって、先行者があろうが濁水であろうが、本流のヤマメであろうが、「数釣りでは負けたことがない」。取材当日の気温は32度。湯水ぎみの白昼、週末、朝マズメに先行者があつたかもしれないがほかの釣り人はなし。つまり、それほど最悪の状況。しかし栗田は2時間弱で、9寸を頭に20尾は上げた。食い波や底波と呼ばれる、底に沈んでゆく主流に餌を入れ(つまり餌を沈ませ)できるだけ細い糸、小さなオモリでナチュラドリフトさせる——自然に流すことが主流である現在の溪流釣りであつて、氏のやり方は徹底的に異端である。成魚放流のないイワナ場ではとくに、イワナは、春先の一時期以外は水面あるいは水面直下で餌を食う、と氏は言う。大きなイワナほど、餌の集まりやすい、流れの緩やかな水面近くに定位して、淵の底にはたしかに魚はとどまってる。けれどそこは餌場ではない、と言うのだ。「底をとって深い」

### 前アタリ? そんなのとれりゃ超能力者だつての。 読みの修三(深流にて)

「ヤマメは、あなたが思っているより、もう20cm、深い所にいるんですよ」。イメーが現実的で、実効性がある。

「ヤマメは、あなたが思っているより、もう20cm、深い所にいるんですよ」。イメーが現実的で、実効性がある。

### アタリは、「待つ」もんじゃなくて、「出す」もんだろ。 踊らせ魚賢(本流にて)

「魚に欲があるとダメよ」魚を捕りたい一心だと自分が主人公になってしまふ。「竿は、振るものじゃなくて、仕掛けを送るものでしょ」竿を振るとは、自分が主人公だということであり、仕掛けを送るとは、餌が主人公になることだ。

「テンカラ(和式毛バリ釣り)はある意味で簡単だ」テンカラは、魚が出れば合わせればいからだ。対し餌釣りは、目印と、竿から手に伝わる微弱な電気水の中を読み、そのイマジネーションのクライマックスとして魚をヒットさせなければならない。だから難しく、おもしろいのだ。翁は言う。「淵尻で食うことが多いって言うなら」、渓魚が警戒心をもって餌を追うとき、淵尻(次の落ちこみの手前、つまり縄張りの端)まで追跡したうえ——遠慮したうえ——、食うことが多いとされる。ハリ掛けした時点で餌は死ぬ。いかにナチュラドリフトさせても、それだけでは、投餌点から淵尻まで餌は死んでいる、ゴミに等しい。ナチュラドリフトは前提だ。その過程で、いかにフカし、送りこみ、餌を踊らせて食わせるか? アタリを待つのではない、アタリを「出す」か? それが溪流釣りの醍醐味だ。イマジネーションとシミュレーションの間の薄膜……」。翁は言う。

### 撃

つ。ピンポイントにいるイワナを狙い撃ちで狩る。栗田の釣りは、釣りというよりは射撃に近い。

### 道

志川は難しい。釣りが多く、釣り人の頭の中に、溪流釣りのセオリーという先入観が満ち満ちているからだ。たとえばヤマメ。速めの流れにつき、俊敏で、早合わせ

### 逆

説ではないが、釣りとはいさなり。魚賢翁の話を聞いてみると、そう、思えてくる。